

## 【巻頭言】

### 「学会の役割と情報発信」

平成 23 年度 エレクトロニクスソサイエティ会長

小山二三夫（東京工業大学）



今年度エレクトロニクスソサイエティ会長の重責を仰せつかりました。電子情報通信学会には、大学4年で学生会員になってからお世話になっておりますので、早いもので32年になります。全国大会、研究会、論文誌などを通して研究を進めていく上で、学会からたいへんな恩恵を受けて参りました。また微力ながら、研究専門委員会委員・幹事・委員長、会誌特別編集幹事、ソサイエティ庶務幹事・国際担当幹事などを通して学会運営にも携わる機会を頂きました。

現在、エレクトロニクスソサイエティは会員約7,500人を擁しています。本会の会員数減少が問題になっておりますが、少子高齢化の波や、欧米の学会とのグローバルな競争もあり、また企業の研究開発部門の学会への参画がやや薄れるなど、今後大きな問題かもしれません。学会としては、いかに魅力的なサービスを会員に供与できるかが求められます。

全国大会（総合大会、ソサイエティ大会）は、最新の成果を発表し、分野全体の発展に大きく貢献してきたものと思います。小職の専門分野であります光エレクトロニクスでは、本学会と応用物理学会の全国大会は、分野の発展、実質的な産学連携推進の意味で大きな役割を果たしてきました。これからも、会員への利便性を高めつつ魅力的な大会作りが求められます。また、エレクトロニクスソサイエティには、分野がほぼ確立した第一種研究専門委員会として15、新分野、横断的な分野に対応する時限研究専門委員会として8が、活動しており、これら研究専門委員会が運営する研究会は、深い議論の場を提供する役割を果たし、分野の勃興期には特に大きな貢献を果たしてきたものと思います。今後は世界を先導するような新分野の創出を牽引するような役割が求められます。

学会からの情報発信として、ホームページ、論文誌の充実、会誌の電子化、研究会技術報告のアーカイブ化などの推進、ニュースレターなどの刊行物の内容の充実を進めるなど、さらに取り組むことが重要だと思っております。今回、ソサイエティ執行委員会の担当委員各位のご努力下、ホームページの刷新、今回が刷新後第1号となりますニュースレ

ターの内容充実化を進めることができました。

また、6年ほど前に本ソサイエティでは電子ジャーナルELEX (Electronics Express) を刊行致しました。迅速な出版、カラー化、動画可能などが特徴で、我が国における電子ジャーナルの先鞭をつけて、今年度からレター論文を統合する形で内容の充実化を進めます。同種の電子ジャーナルが今年度通信ソサイエティからも発刊予定とのことで、電子情報通信学会の主要な論文誌として定着しつつあります。しかしながら、昨今は、インパクトファクターなどによる論文誌の評価も定着し、より内容を充実するためには、インパクトのある論文を集める不断の努力が求められます。

小職の専門分野であります半導体レーザに関しては、室温連続発振が実現されてから、約40年が経過し、光通信や光ストレージ用光源として大きく成長し、我が国はこの分野を先導してきました。モード制御、高信頼化、長波長化、可視光レーザ、波長制御、集積化技術、量子井戸・ドットレーザ、面発光レーザ、青色半導体レーザなど、新しい技術課題がその時代時代で克服され実用化をもたらしてきました。この分野の発展は、大会・研究会発表などを通じて、産業界と大学が緩やかな連携を通して進められ、成功を収めた研究開発のよい事例とも言えます。学術・技術分野の新展開には、活力あふれる若手研究者の力が必須であり、優秀な若手人材を収容する分野としての魅力を保ち続ける必要があります。我が国の将来の産業基盤を担う若手研究者育成にも、本会の大きな貢献を願う次第です。

#### 著者略歴：

昭和55年東京工業大学・電気電子工学科卒、昭和60年同大学院博士課程修了。同年同精密工学研究所助手、昭和63年同助教授。平成12年同マイクロシステム研究センター教授、平成22年同フォトニクス集積システム研究センター教授。半導体レーザ、半導体光集積回路の研究に従事。平成2年電子情報通信学会篠原賞、論文賞受賞。平成10年丸文学術賞、平成16年市村学術賞、平成17年電子情報通信学会エレクトロニクスソサイエティ賞、平成19年文部科学大臣表彰科学技術賞、平成20年IEEE/LEOS William Streifer Award など受賞。電子情報通信学会／応用物理学会／IEEE フェロー。

## 【巻頭言】

「ガンバレ 日本!、頑張れ エレソ！」

平成 23 年度 エレクトロニクスソサイエティ 次期会長

荒木純道 (東京工業大学)



この度、エレクトロニクスソサイエティ次期会長に選出された荒木純道です。エレクトロニクスソサイエティ活動活性化に向けて微力ながら尽力させて頂きたいと思います。

さて「失われた 20 年」からまだ完全には立ち直っていないところに 3 月 11 日午後突然東日本を襲った未曾有の大地震、大津波、そして危険度レベル 7 までに達してしまった原発事故と放射能汚染は日本と日本人に大きな課題を幾つも突き付けています。このことは今まで日本が抱えていた潜在的な問題が一挙に吹き出てしまったとも言えないことのないのでしょうか。

私は当日大学の研究室(9 階)におりました。激しい揺れで部屋の壁に小さな穴が開いてしまったり、棚から本などが落ちてきましたが、幸い怪我はありませんでした。学内に居た大勢の教職員、学生と一緒にキャンパス内の広場に一時避難しましたが、首都圏は完全に交通手段を失ってしまいそのまま学内に留まらざるを得なくなりました。そして学内の避難場所ですすかにつなごうとしたインターネット情報を皆で眺めていました。(非常食や非常電源投入も初めて体験しました。)翌日は大学の後期入試が予定されていましたが、列車本数の大幅減のため監督者不足となり急遽代役に駆り出されました。ただその時点では事態の重大さ深刻さはまだ正確には認識しておりませんでした。

ところで科学技術やエンジニアリングの意義が常に最適な問題解決のためにあると理解するのであれば、いまこそ電気電子通信系研究者技術者の出番であると思います。その中でも、電子情報通信学会として取り組まなければならない喫緊な課題としては

- ・ロバストな通信/電力ネットワーク
  - ・電気電子機器の省電力化
- などが上げられると思います。

エレクトロニクスソサイエティがカバーしている範囲は広範で(有機、超伝導、マイクロ波、電磁界、光、量子、機構、記録、表示、材料、集積回路など)しかも幾つかの魅力的な萌芽的分野を視野に入れていています。しかし、関連学会との連携、研究会の活性化、和文論文誌のあり方や国際会議開催などについて改善すべき課題も少なからず残されており。また IEEE の一極支配に抗して、アジア諸国との連携を図ってアジアにおける学会活動の拠点を構築していくことも重要な方策であると考えております。

今回の大震災は敗戦以来の国難と言われますが、でも 20 年以上かかるとの当時の予想を上回るスピードで日本は戦後復興を遂げ高度成長を達成しました。

そこで再びエレクトロニクスの知恵と技術を結集して、

頑張れニッポン!

著者略歴:

1978 東工大博士修了。1979-1980 テキサス州立大客員研究員。  
1985-1995 埼玉大電子工学科助教授。1993-1994 イリノイ州立大客員研究員。

1995-現在 東工大電気電子工学科教授。

1979 学術奨励賞 2006 論文賞 2007 フェロー。

マイクロ波研委員長、東京支部長など歴任。

2010 エレソ主催国際会議 APMC2010 実行委員長。